報告様式　２－Ⅰ　　令和５年度　長与町学校評価（共通の評価項目）報告書

長与町立長与中学校

Ⅰ　共通項目

基本目標　　心の豊かさと自ら学ぶ力を育てる学校教育の実現

目標	取組の内容 （必須…町内共通項目）	評価 (最高４)	分析及び改善策 （○…成果、●…課題）
心の豊かさと自ら学ぶ力を育てる学校教育の実現	Ⅰ　豊かな心の育成 ①いじめ、不登校への適切な対応（必須）	３．６	○毎月の生活アンケートや日々の生徒観察、家庭連絡などを通して、いじめの早期発見、適切な対応に努めている。
	②道徳教育の充実、人権教育の推進	３．０	○平和学習は、台風のため臨時休業となったが別日で設定を行った。人権集会に向けて、生徒が主体的に取り組んだ。 ○職員が輪番で道徳科の授業指導を行うことで、全教員が道徳科についてより意識が高まった。
	③生徒による目標設定と達成努力	３．１	○体育大会、修学旅行、合唱コンクールをはじめとした学校行事や部活動で生徒が主体的に活動に取り組んだ。部活動は、運動部活動が土日の活動に地域移行し、文化部が次年度から休日活動しない方向で動いている。今年度の反省を次年度に活かせるよう、教育委員会、NSC と密に連携を取り、また、学校で行えることを見極めながら推進していく。
	２　基礎学力の充実 ①分かる授業の実施	３．１	○●「まとめ・振り返りの時間の確保」が授業の中で定着してきた。より主体的な学習につなげるために生徒の言葉から引き出していく必要がある。
	②家庭学習の習慣化	２．７	●「家庭学習の時間の確保」について、１年生で他学年に比べ前期より数値の落ち込みが大きかった。授業の内容の理解、家庭学習の量や質、やり方の工夫等悩みを持っているととらえる。また、教師側も課題のやり方、出し方（教科間の内容、量、質等の確認）、点検の工夫、そして家庭との連携が必要となる。
	③キャリア教育の充実	２．８	○教科部会の設定や提供授業を通し、授業力改善の意識は高まった。また、提供授業日を工夫したことで、担当教科以外の授業を参観することがスムーズになった。
	３　健康安全教育の推進 ①基本的生活習慣の確立	２．７	●時間遵守や地域の方への挨拶などの課題がある。２学期は、教員が重点的に実践したところがあり、少しずつ学校生活の場や登下校の場での変化がみられた。
	②健康・体力の維持・増進	３．３	○給食担当、学級担任、管理職などの複数の目で給食における事故の未然防止に努めた。家庭との連携でアレルギー対応の確実性を今後も維持する。
	③生徒の危機管理意識の高揚 （食物アレルギー、メディア安全等）	３．４	○タブレット端末の使用法や家庭での SNS の利用など、情報モラルに関する更なる指導が必要である。１年生では冬休み前に高等学校教諭から「デジタルデバイスが与える影響」「ネットトラブル」講話を行った。機を逸しない、継続的な指導を今後も行っていく。

	4　特別支援教育の充実 ①一人ひとりのニーズに応じた支援（必須） ②生徒の困り感の解消	3．4 3．5	○特別支援部会が軌道に乗っている。支援の必要な生徒への対応等が明確になってきている。また、教員研修についても計画的に行われ、支援の必要な生徒家庭への具体的な対応が始まっている。 ○子ども政策課、児童相談所への通告、社会福祉協議会とのケース会議等、学校を取り巻く外部機関との連携もスムーズに行えた。また SSW の毎月の不登校対策部会への参加は、情報交換には効果的であった。
	5　国際化への対応 ①日本文化や地域への理解 ②コミュニケーション力の育成 ③グローバルな視野の育成	2．9 2．8 2．3	○ふるさとキャリア教育における体験学習では、地域の歴史や文化に触れる機会を設けている。 ○●１年生では、県内の ALT（外国語指導助手）と触れあう NICE（英語による長与町国際コミュニケーション活動）が実施できた。普段の教科の授業等でも国際感覚を身に付ける場をつくっていくことが課題である。
	6　教育環境の整備 ①学習環境の整備 ②ＩＣＴ機器の活用、情報の発信	2．9 3．6	○学校ボランティア「そてつの会」の方に腐食外壁撤去、塗装作業や部活動倉庫の移動を行ってもらった。また、町から駐車スペースに横断歩道や駐車禁止エリアラインを設置していただき、安全面の対策を行った。 ●清掃回数が少なくなった。その分、無言清掃を徹底するなど、更なる個々の意識を高揚させていく必要がある。 ○授業の中でタブレット端末が日常的に使われるようになった。 ●生徒の利用について、情報モラル等の指導が大切になっている。個別最適な学びを実現するためのタブレットドリルの活用については、今後も職員の研修を深めていく必要がある。
	7　教職員の資質向上 ①指導力の向上（必須） ②服務規律の遵守 ③「教職員の働き方改革」に基づく風通しの良い職場づくり	3．3 3．6 3．3	○全職員授業公開を実施し、教科の枠を超えた相互研修を行った。また、ながよ検定に向けての補充学習など、同僚性・協働性による教科の枠を超えた取組が行われた。 ○指導と評価の一体化のための研究を更に推進する必要がある。 ○月 80 時間以上の超過勤務者がほぼなくなった。教職員の業務分担の見直しとともに、個々の業務の効率化が求められる。R6 の年間 1,085 単位の授業時数に向けて、各担当と協議し計画上は達成予定である。超過勤務時間の減少も含めて職員の働き方の意識が高まってきた。３年の進路事務に関する時間運用については課題である。 ○学年所属職員のつながりを中心とした同僚性・協働性の意識は強くなっている。

報告様式　２－２

２　自己評価のまとめ（成果・課題等）

（１）成果

①不登校者数において、劇的な変化は見られないが、生徒は、それぞれの希望を達成しようと努力している。そのような中で、別室登校者数が減少した。時間帯では、別室に誰も生徒がいない時間ができた。また、教員研修についても計画的に行われ、支援の必要な生徒、家庭への具体的な対応が始まっている。

②昨年度までのふるさとキャリア教育の研究を通して、系統的につながりのある体感学習プログラムを構築した。今年度は教科の中にキャリア教育の視点を意識した学習指導とともに、特に評価について外部から講師を招き、理解を深めていっている。また、授業改善のための授業研究を全教員が取り組んだこと、教科間での授業反省等を含み、教科部会等にも力を入れてもらい特に後輩の育成に力を注ぐ先輩教員の姿がうれしい。授業改善については、教員の意識が高まり、授業改善にも積極的である。今後も、AI ドリルの活用について継続して研修を行い、個々に合わせた課題の提示、ながよ検定の事前・事後の補充学習や自主学習ノートの徹底など、基礎基本の定着と学力向上の取組に一層力を入れていく。

③生徒には「いじめは絶対に許されない行為である」「いじめの傍観者もその行為を許していることになる」ということを認識させ、日々の生活の中でも見守りや必要時のチャンス相談、あるいは定期的な教育相談を行った。いじめやいじめの兆候と思われることを把握した場合には、職員間で共有し、迅速、丁寧に対応した。SC や SSW、警察等外部機関と連携して対応しており、継続をしていく。

（２）課題等

①「家庭学習の時間を確保」「計画性のある学習」について、保護者・教員とも、低い値であった。その中でも１年生においては、授業の内容の理解、家庭学習の量や質、やり方の工夫等、悩みを多く持っているととらえられる。教員も個々に対応した課題の出し方（教科間の内容、量、質等の確認）、点検の工夫、そして家庭との連携が必要となる。

②「メディア」「家庭教育 10 か条」等の項目は生徒、保護者、教職員においてポイントが低く、依然として課題である。

３　学校関係者評価　＊令和６年２月８日に、学校支援会議（学校評議員会）の中で実施

・不登校・別室登校生徒の状況、対応について

→　不登校傾向の生徒は昨年度と人数の変化は見られない。生徒の休みがちになる要因は様々あるが、一人一人の生徒、家庭に寄り添いながら丁寧に対応している。教室に入ることが難しい生徒には、別室（学習室）登校や適応指導教室への通室、民間施設の利用等、段階的な対応も行っている。

・生徒の地域行事への参加についての学校の受け止め方について

→地域行事への参加生徒の捉え方、認識の違いがあるのかもしれない。生徒が「地域行事に関わる。」とは、自分たちが主体的に行事に関わることが参加と捉えてよい。例えば「川まつりに行った。」としても参加と考えてよいと思う。そういったことを教えていきたい。

・家庭学習の評価の低さについて生徒はあまり感じていない。保護者・教師との捉え方の違いは何かについて
→学校では、以前のように生徒に過度の負担になる程の宿題は出していない。生徒が「家庭での学習」＋「塾で学習を行っていること」を家庭学習と捉えていることもあると思う。塾に行っていない生徒などに個に合わせた指導が必要になってきている。そのよい例として AI ドリルを使わせる工夫。どの家庭でも使用できる。
・部活動の地域移行によって、結果を出したい生徒と純粋に活動を楽しみたい生徒との温度差が出てきて、目標のずれを感じるジレンマがある。
→まず、土日に学校から部活動がなくなっていくということを理解していただく。 NSC は、土日に活動する場を提供し、子どもたちがスポーツ活動を行っている。成果第一主義から脱却をしていっている。自分の体を大事にし、運動を楽しむ、将来スポーツを生活の一部として根付かせる、また次のステップの場を与えている。そのような活動を目指している。
・ふるさとキャリア教育について
→各学年で系統的につながりのある体感学習プログラムを構築している。次年度以降も継続させたい。その中で３年生では、情報発信等を行いたいと生徒は計画を進めてきたが、教員側が情報モラルや発信の方法などの整備が追いついていなかった。次年度以降、情報発信、想像力向上など、夢の膨らむような活動を行っていきたい。

４　対策等の見直し（学校関係者評価を受けて）

・生徒評価で、「家庭学習の項目」「１」の評価を付けた生徒について、他の項目との関係や、日頃の学習状況等の確認をするとともに、生徒や家庭の不安感や困り感はないか確認する。低学力、支援の必要な生徒への対応について活かしていく。
・学校ホームページについては、地域に開かれた学校を示す手段の一つとして今後も活用していく。また、tetoru の活用についても検討が必要である。ホームページでは、トピックスの欄を作成し、行事等の内容について、更新頻度を増やすよう努めている。
・部活動の地域移行については、まだ保護者の理解が完全には進んでいないことが分かった。生徒・保護者への更なる説明の場の設定が必要である。
・「家庭学習」「ネットの危険性や情報モラル」「家庭教育 10 か条」の項目は、生徒、保護者、教職員においてポイントが低かった。このことを PTA 活動等を通して家庭に周知し、学校・家庭が連携していくものとして、今後も学校の情報を発信していきたい。

【留意点】
評価は、自己評価をもとに学校関係者評価にも十分配慮し、総合的に判断し記入する。
評価は４段階とし、以下による。

４　十分達成できている　　３　概ね達成できている
２　どちらかというと達成できていない　　４　ほとんど達成できていない